

世田谷区のごみ減量を支える市民の熱意
—雑居まつりの事例報告から、明日に向けての提言—

高岡 潤子

(環境省登録環境カウンセラー (市民部門))

序

43 万世帯、83 万人の人口を抱える世田谷区、実に色々な人々が住んでいる。その中には、この世田谷を自分自身のふるさとと思ひ、次の世代にできる限り良い環境で譲り引き継いでいきたいと思う人々も多い。ある日、自分たちがあまりにも沢山のごみを出していることに気づき、自分達の手で少しでもこのごみを減らせないと行動を始めた市民の事例として、雑居まつりの実行委員会の活動を報告することで、熱意ある市民がごみ減量活動の牽引役となる、世田谷区ならではのごみ減量活動の将来像を提言したい。

雑居まつりにおけるごみとの取り組みを『雑居まつり式クリーンパンフレット第 33 回 (2008 年) 改訂版 8』(雑居まつり実行委員会作成)を資料として、表 1 の様に整理した。この、研究ノートは、私自身が参加団体の 1 つとして 5 年間この祭りに関わってきた経験と、上記資料の記述による。引用要約を快諾して下さった上記実行委員会の皆様に深く感謝している。

上記資料によれば、22 年前には容積にして 2 トントラック 4 台ものごみを出していた祭りが、現在では通常の回収車で回収しきれぬ程度の排出量までイベント時のごみを減少させてきている。この実績には、注目すべき点が多くあり、今後の世田谷区内でのごみ減量活動に参考になる点も多いと考えるので、本論において、特に注目すべきと考える 3 つの点と、今年 (2008 年) の特徴的な動きについて報告し、考察したい。

1. 雑居まつり実行委員会の取り組み

—不特定多数が集まる場でのごみ減量活動事例—

① 参加団体のごみ発生者としての共通認識に基づく発生抑制

第 1 には、出店団体の自己責任によるごみの持ち帰りの徹底があげられる。この考え方は、流通・営業などに使われる包装容器は業務に使う生産者が最終処理まで責任を持って処理すべきだという「拡大生産者責任」の、まつり限定ローカルアジェンダ版とも言えるのではないかと考える。ぜひ、この小さな祭りで可能な、責任をもったごみ処理が、世田谷区内また、日本全国で当然のこととなる日が来ることを期待するものである。もちろん、自己責任によるごみの持ち帰りが、簡単に徹底できたのではないこと、違反する団体や、無自覚にごみを放置する参加者に繰り返し注意を喚起し、共感を持てる形で呼びかけ続け

てきたことが現在の状態を生み出したことを忘れてはならないと思う。

② 問題意識や解決策の可視化で、共通認識を広める

第2には、ごみ取組に関する共通認識を作り上げてきた過程に注目したい。雑居まつりという1年に1回の祭りにおいて、目の前に大量のごみが発生し、適正な処理ができなければ祭の存続（事務局活動の維持）すら難しい、という誰もが目に見える課題から出発して、実行委員会という共通の場で話し合い、まず課題を共有し、翌年に向け解消方法を模索する、という形で一步一步進めてきたことに意義を感じる。

多くの人が、このごみ減量活動に参加できるよう、作業マニュアルを整備する一方で、先の表の資料としたクリーンパンフレットのような形で雑居まつりのごみに対する取り組み経緯を資料として全団体に配布、より誰にでも分かりやすいものへと改定を重ね、このまつりの一種の文化として定着させていることも、ごみ減量が着実に進んできた理由の一つだと考えられる。実際、筆者自身が参加している団体のメンバーで、実行委員会に参加しこのパンフレットを読むことで、「自分たちに何ができるか」という立場から協力を申し出るに至る例を見てきている。

「誰もが気持ち良いまつりの環境をつくる」という意味で、ゴミ係ではなく、クリーン係という名称にしている所なども、多くの協力者が気持ち良く参加できる、共感を呼ぶ工夫の一つだと思う。

何度でも、基本の考え方「ゴミは出さない」を確認し、「広場」¹⁾という、まつりの町内会に当たるような組織を通じて、それぞれの参加団体の実態に即した実践を促す、更に翌年に向けて自分たちの行動の効果を確認する。この積み重ねが、雑居まつりのごみ減量文化を創り出している。

③ 実施上の課題を解決し、3Rの優先順位を守る努力

第3には、使い捨て食器を減らすための、様々な試みに注目したい。「使い捨て容器を減らしましょう」と言うのは簡単である。雑居まつりの良いところは、当日参加者にも事前のチラシ・ポスターで食器持参を呼びかけ、公共の貸出し食器や実行委員会で購入した食器の貸出を行い、更に食器を洗う場所も確保する、という本当にリユース食器を活用できる環境整備をしてきたことにあると思う。3Rの優先順位、一に減量、二に再使用、再生利用（リサイクル）は三番目と、理念では分かっているが、実際に再使用が可能な状況があつて初めて、参加者も協力でき、使い捨て容器の利用抑制につながるのだ。

デポジット制の試みは、現在中断している。雑居まつりの出店者の傾向としては、食器がいない串や紙で包んで手で食べる食品を使うことでプラスチック製の使い捨て食器を減らしたり、それぞれの店で貸出食器などを活用したり自分で食器を用意したりして、売ったお店の責任でごみを減量するという姿勢が浸透して来たため、デポジット制が不要

になったということらしい。

食器持参の参加者には、各店で大盛サービスなど、特典を付ける工夫をし、まつりに参加するすべての人、実行委員・参加団体・当日参加者の全員に「ゴミは出さない」という目標に向け、前向きな参加を促している。

ここまでやっても、返却式の食器を洗わずに放置する参加者もいないわけではない。ここでも、近くに出店している参加団体が作る「広場」というコミュニティーが、放置された食器の回収でも助け合うことで使い捨て食器からのごみの発生抑制に役立っている。

2. 2008年度に見られた新しい活動

―世田谷区のごみの分別方法変更に対応して―

① 雑居祭への、世田谷区のごみ分別変更の影響

最後に今年の新しい動きについて触れたい。雑居まつりにおいても調味料の汚れの付いたプラ容器の処理は特に2000年以降課題となって来ている。また雑居まつりは10月の第2日曜日に開催されるため、今年も世田谷区全域でのごみ分別方法の大変更の直後に当たりどのようなごみ箱を設置しても、多少の混乱は予想されていた。

ここで、分別の変更に関して、内容を確認しておこう。世田谷区では、容器包装リサイクル法でリサイクルの義務を課せられているプラスチック（以下、容リプラと略す）のうち、中間処理施設の確保ができたペットボトルと白色発泡スチロールトレイ以外の容リプラを暫定的に焼却処理による熱回収（サーマルリカバリー）することに決め、また焼却炉の能力向上により大気汚染の懸念が無視できる程度だとしてプラスチック製品・ゴム製品など石油由来の高分子化合物も「可燃ごみ」のくくりで処分することにした。上記2品以外の、プラスチック製品をすべて「可燃ごみ」へと変更し、2008年10月1日から世田谷区全域で新しい分別方法によってごみの回収を行うと言うのが主な変更点である。

雑居まつりの基本的スタンスは「ゴミは出さない」であり、「燃やすと有害なものを減らしたい」（表1・1990年）と考え活動してきた。新しい焼却施設は安全に燃やせるから大丈夫と言われても、むしろ戸惑いを感じると言うのが、真剣にごみ減量に取り組んできた実行委員会の実感であった。

80万人以上の区民が一斉に実施する行動の場合と、ごく一部の熱心なグループのできる行動ではレベルに違いが出るのは仕方がないことではあると思う。しかし、この分別の変更は、ごみ減量活動に対して最も熱意ある区民が、今回の区の政策転換に最も失望感をおぼえる結果になったように感じられてならない。環境問題の解決は、フロントランナー方式²⁾でなければ抜本的解決には至らないと言われている。熱意ある区民の先進事例を活用して、世田谷区民の潜在力を引き出すような施策が望まれる。

ごみの分別変更に関して実行委員会で話し合い、実際的な対処として、ごみ箱に「世田谷区では10月1日からプラスチックはもやすごみになりました」という表示をつけるな

ど、注意を喚起し区の回収ルートに乗せられるごみの出し方をする事になった。

② プラスティックの自主回収ルートを活用する試み

ただし、自主回収ルートに乗せることのできる資源は、できるだけマテリアルリサイクル³⁾のルートに乗せて来た、ごみに対する共通認識の上に立って、「一つでも多くの発想を実行していきたい」(表1・1991年)というスタンスに立つ話し合いの中から、2つの新しい提案が参加団体から出され、雑居まつりから回収される資源の新たな活用先が発見されている。

1つ目は、高温で洗浄し再使用が可能なペットボトルを、水質改善用の有機資材の販売のボトルとして再使用するというルートである。出店団体自身が使用済み飲料ボトルを、非飲料用として再使用(リユース)したいという申し出で、加熱洗浄できるボトル(飲み口部分白)と加熱できないボトル(飲み口部分透明)の見分け方なども含め具体性のある提案だった。「新しいペットボトルを買うと1本数十円になるので集めている、ラベルとキャップは新しく付けて使うので外して集めたい」とリユースの経済的メリットについても発言があり、雑居まつり実行委員会として分別回収し、当該団体に活動支援として譲る形でリユース用回収が実施されることになった。

2つ目は、容リプラの自主回収の実験取り組みを始めた団体の提案から、容リプラマークの付いたポリプロピレン(以下、PPと略す)とポリエチレン(以下、PEと略す)を分別回収する試みである。この団体は、世田谷区の分別変更に当たり、本来素材として循環すべき容リプラが、熱回収の名のもとに実質焼却処分されることに抵抗感を持ち、まずはレジ袋を断るなどだれでもできる、過剰なプラスチック製品の利用を断ることからごみの減量を考えていこうと言う主張を持っていた。この考えは、3Rの優先順位の基本を大切にす雑居まつりの文化とも合っており、雑居まつり式の10番目のごみ分別区分として認められることとなった。回収は実行委員会が主体として行い、活動支援として資源を当該団体に譲渡するというペットボトルと同じ方式で実行委員会に提案がされ、承認された。

③ 実施に向け、課題を共有し対処を検討

こんな小さなまつりでも、社会の縮図のように、ごみ問題の解決に至るハードルが見受けられる。

一つは、利権・利害関係の問題である。資源を引き受ける団体はまつり参加の帰りの車などで持ち帰れる範囲の量の資源であれば、運送費の新たな負担なしに、有価値の資源を無料で手に入れられることになる。雑居まつりでは、実行委員会で論議し、その団体の活動趣旨への応援の意味も含め合意を形成した。

もう一つは、集まる資源の質の問題である。ペットボトルも飲み口の色を見分けないと、

再使用できるものかどうか分からず、多少の混入は覚悟の上で回収することになっている。最終的にはごみ箱の片付けをするクリーン係が目で見分けることになるだろう。

PP・PEの回収の方はもっと深刻である。自主回収の引受先は、PP・PEならばリサイクル後の製品化の道があるとしている。それどころか、中国などの資源需要が高まっており国内の優良なリサイクル材料は品薄な面すらあるとのこと。ただし、利用可能なのは、きちんと分別された単素材のプラスチックなのである。一部のメーカーでは、三角形のなかにプラと書かれた容リプラマークの下に、PPなどの素材のヒントが同時に印刷されているが、容リプラマークだけしか表示していない物では、一見透明なプラ袋が、PPなのかPET（ポリエステルテフタレート）やアクリルが入った複合素材なのか分からないので、分別が失敗した場合、回収した資源がこの提携先にとっては原料としては使えないものになってしまう。本当にリサイクル適した資源がどのぐらい集まるのか、引き受け団体も、歩留まりの実験をするぐらいの覚悟で、リサイクルの可能性を探るために、今回の実施となった。

また、回収の物流ルートが確立していない自主回収の場合、提携先に持ち込めるまでの保管場所と保管状態もまた大きな問題となる。数年前、区が空き缶やビン紙資源の回収を始めた時も、自主回収グループでは、提携先の求める輸送ロットまで資源を集めるのに時間がかかりすぎるようになり、自主回収活動自体の存続が懸念されたことすらある。輸送費・保管費の援助として、区から資源自主回収団体に回収量に応じた補助が出ていることは、回収活動を続ける大きな力となっている。容リプラに関しても、この制度の適応が急がれる。

結び

この事例研究から得られた明日の世田谷区のごみ減量に対する提言としては

1. ごみはできるだけ出さない、減量する（リデュース）ことを区民の合意・文化とするため、必要性、歴史的経緯、科学的有効性などを含め丁寧に啓発活動を行う
2. 熱意ある区民の先進的取り組みを支援すると同時に、客観的な有効性の評価を行い、有効なものは必要な環境が整った地区や団体から少しずつでも広めていく道筋を用意する

この2点を強調しこの研究ノートの結びとする。

【注】

- 1) ここで「広場」と言っているものは、雑居まつりという100近いグループが参加するイベントにおいて、近隣に似通ったテーマをもった活動グループの出店場所を集め、相互交流を図りつつ、祭の円滑な運営のため世話役（広場代表）を選出する母体にもしている「雑居まつり」独特の組織のことである
- 2) 身近なものでは家電の省エネ基準などに実用化されている、基準年で一番環境に良いとされるもの（トップランナー）を、目標年の標準として採用することにより、環境配慮活動の水準を一挙に上げる手法
- 3) マテリアルリサイクルは、リサイクルと言うとまず思いつく、アルミ缶を鋳つぶしてアルミ素材として使うなど、素材として再利用する方法だ。プラスチックに関しては、高カロリーの素材であることを活かし燃やしてエネルギーを回収する、エネルギーリカバリーや、石油に戻して使うケミカルリサイクルなど、リサイクルの方法も多様化してきている。

